

は流記坪付帳（流記帳）のごとき条里制の基本資料であるが、平安末から鎌倉期へかけては寄進状・売券が出始め、南北朝期にもこの両者が圧倒的に多く、検注免田等取帳・免田坪付の基本資料はわずかである。南北朝合一期後は期間も短く、史料数も多いとはいえない。しかも、寄進状は少ないのに対し、売券の多いのが目立つ。また、この期にみられる近本庄関係資料には、基本資料（上番馬上取帳その他）がみられる。応仁・文明の大乱後から戦国期へかけては、寄進状・売券がほとんどで、基本資料（内検帳・名田数之事等）はわずかである。このように、109点にものぼる史料については、限りなく多くの視点からの活用法があることであろう。

こうして、編者の多年にわたる精力的探訪の累積によってなった本条里制史料集は、その利用価値が際限なく拡大され、関係諸学の研究の深化・発展に大きく寄与されることとなるのである。ここに、その内容の一端を紹介し、編者の多年の研鑽に改めて敬意を表するものである。（浅香幸雄・専修大）

侯仁之著 歴史地理学の理論と実践：上海人民出版社，1979年，A 4判 463頁，2.20人民元

中華人民共和国成立後、中国における歴史地理学関係のまとまった書物として、管見の限りでは最初のものである。この書は、北京大学教授の著者が20年来発表してきた論文を、一冊に編集したものである。内容は歴史地理学の理論探討、沙漠の歴史地理学的考察、都市の歴史地理研究、其の他の4部構成である。以下、簡略に内容を紹介してみよう。

歴史地理学の理論探討では、歴史地理学の理論と研究法が述べられる。まず、歴史地理学の課題は、歴史時期における主要な人間活動により生じた、あるいは影響を受けた全ての地理的变化の解明であり、その研究対象によって、歴史自然地理と歴史経済地理があるとする。次に、過去を分析することによって現在は理解でき、復原することによって過去は把握でき、そして歴史地理学としては、現在を形成するに至るまでの変化の法則を把握することが必要であるとする。

中国地理学の伝統の一つである沿革地理と歴史地理との関係について、前者は従来、歴史学によって重んじられてきたが、歴史地理学はあくまでも歴史時期の地理本体が対象であり、沿革地理は究明の初歩の段階ではあっても、最終目的ではないとする。

また、歴史地理学と、いわゆる唯物主義と唯心主義との対立については、生産関係の変化に伴い地理は変化するから、社会階級が存在を考慮しない唯心主義は適切でないと述べる。

沙漠の歴史地理学的考察の部では、国土の相当部分を占める沙漠は、国家建設と中国革命実践のための自然改造の対象として重要であり、この沙漠の改造と利用に直結するものとして、沙漠の歴史地理学的考察の意義がまず述べられる。そして、主として考古地理的視点から、西北部の沙漠中に大量に埋没している遺跡を発掘することによって、歴史時代の沙漠の変化を探究するという問題意識に立って、内蒙古自治区紅柳河上の古城の廃墟から、オルドス高原南部の沙漠の変遷が考察されている。古城の復原及び付近の湖沼の消失現象を、『水経注』や『元和郡県志』等の史料で検討を加えながらも、その正確な比定は考古学の復原をまつしかないと指摘する。その他、寧夏回族自治区の沙漠の漢代における開発の状況について、考古学の発掘や実地調査、史料等を利用して、当時の自然環境とともに、古城、古道、古墳の詳細復原が行われている。多数の遺物や写真を利用して、考古地理的分析が十分になされている。

都市の歴史地理研究では、まず古代の北京、元の大都、明清の北京城に関して、都城に関する史料や考古学的調査によって都城の形態、都市水利についてふれ、続いて宮城の改造及び天安門広場の宮廷広場から人民広場への改造について、景観変遷に重点をおいて考察している。宮城と広場は、支配階級の専制的支配の象徴的構築物であるとし、その現代における改造に意義を見出している。また、都市水利に関する論文とし、北京城の都市化に関与した地形・水源・水系の利用の変遷が、特に水源問題に焦点が当てられて述べられている。その他、都市では山西省の邯鄲、山東省の淄博、河北省の承徳の起源・人口・都市化の要因についてふれている。

第4部では、ヨーロッパ勢力の新航路発見以前に中国と南・西アジア、東アフリカとの交通路を開拓した鄭和の遠征、ヨーロッパの唯物主義的地理学者の代表としてのフンボルト、及び明代の地理学者・徐霞客の評伝が収められている。

多くの論文に共通することとして、考古地理的復原の精密さがまずあげられる。綿密なるフィールドワークに基づき、史籍と接合させた復原の手法が随

所に用いられている。ただ難点は、唯物主義的歴史地理学の立場がとられているためか、帝都が有する古代の宇宙論による象徴性や、都市内部の社会集団の動向への言及が必ずしも十分でないことである。むしろこの点は、立場を超えて解明されなければならない課題でもある。

この書は、著者が既に発表した論文をまとめた論文集であるが、長期にわたる文革の混乱の後の、いわば研究の再出発の意味も込められていると感じられる。そのような意味でも、現在及びこれからの中国を代表する歴史地理学者の著書として、必読に値するものであると思う。（森口勝彦：筑波大・院）

龍瀬良明著 黒部川扇状地：大明堂、1981年、A
5判 197頁、2,600円

著者は黒部川扇状地に生まれ育った。黒部川の扇状地は、著者をはぐくんだところである。著者はまた、黒部川扇状地で地理学研究的緒を把握し、研鑽を積み、ここでその研究を大成したのである。まさに著者の学究活動は黒部川扇状地に始まり、黒部川扇状地に至ったといえる。学位論文「わが国における低位生産水田地帯の地理学的研究」もここで生まれ、名著『低湿地』や『自然堤防』もこの扇状地を舞台に発展、今またこの著書でその大業を結んだものである。その意味では、この書は著者の研究の歩みであり、黒部扇状地開発の歴史ともいえるものである。わが国でも、急流中の急流として知られる黒部川が、巨礫を堆積し形成した広大な扇状地の土地利用の変遷、かつての瘦地が豪雪寒冷・単作などの劣悪な条件下で、現在の豊饒肥沃な耕地に変容するに至った経緯を余すところなく示しているのが、その内容である。以下、順を追って内容を紹介したい。

第1章では、「黒部川扇状地扇央における水田略史」としてあるが、まず、この書の全容を明らかにしたものである。

第2章は、新田開発を扱っているが、特色として指摘できる点は、黒部川扇状地の開田は近世の前田藩治政下における扇状地特有の傾斜地を利用したの開発であるとしながら、富山県内の他の扇状地や、全国的傾向との比較考察を、千数百の開発事例から類型化することによって行っている点である。

第3章では、「低位生産水田地域の分布」と題して、黒部川扇状地の水稲収量の低さを、第二次世界大戦前後の比較を全国的視野から検討した後、低位

生産水田のうちでも最も注目すべき秋落水田について追究している。

第4章は、著者がこの書の中で最も力を注いだところである。すなわち、保水力増大・水温上昇・鉄溶脱防止をねらった戦後初めての、流水客土による土地改良という前代未聞の画期的方法についての詳察の項である。低水温と収量との関係を低地域の扇状地と比較したり、秋落と土壌との関係を化学的に究明したり、低地カバーのためには多肥農業しかとるべき方法のなかった点など力説しながら、他に類をみない高い水田率と、冷水害による低収量という潜在的悪条件の克服経過について論述している。さらに、自然的背景が必然的にもたらした多肥農業補助の水田裏作におけるレンゲ栽培や、低生産性の反映した早場米卓越現象と出稼卓越地域など、納得のいく論述がみられる。また、この章の後半に、流水客土実施の要因分析がなされている。戦前の多肥農業による増産成功があたとなって、戦中・戦後の不相応な供出割当という結果を招いたこと、その窮余の一策が土地改良方法であったことなど、精密な調査統計資料に基づく考察が加えられている。

第5章は、経済の高度成長下における農業近代化具現としての圃場整備事業にとりくんでいる。戦前の耕地整理と戦後の圃場整備事業とを対比しながら、その目的・内容を細部にわたって検討し、工事の進展・地表勾配・農道整備・工費の重圧などの特徴を明確にしている。

最後の農業改善事業進展に関する評論では、農地の集団化・農具の大型機械化・労働投下力の効率化・圃場整備の進展など要を得た展開がみられる。

第6章は、昭和20年代における増産目的の流水客土から、高度成長期における農外収入目的の圃場整備・現代社会の需要の多様化に応ずるための水田汎用化に備える再客土についての論述である。水田汎用化をねらう再客土については、過去の流水客土との相違を明確にしながら、調査統計資料やアンケートなどによって客観的に評価している点が注目される。

以上、この書は、黒部川扇状地を凝視しての開発・土地改良・土地利用の歴史であるが、一面では、冷水対策との苦闘の歩み、耕地の高度利用、労働力換金化の実態を明らかにしたものであり、著者の郷土愛に基づく黒部川扇状地研究史でもある。

（菊池万雄・日本大）